

# 中国人の罵り言葉

李 永 寧

## Abusive Language in Chinese

Y. N. Lee

Taking the view that the language a person uses when he or she is angry is a key to understanding that person's value system and true character, I will examine the language of abuse available to the native speaker of Chinese and show its connection to the "Chinese spirit."

はじめに

北千住で千代田線を利用することがある。電車が来る。“我孫子”行き、との標示がある。ちょっと変な気がする。

日ノ丸はやめて、カメの図案をあしらった国旗にしよう、という記事を新聞で見た。高度成長を経て経済大国になったが、何かと弊害を生じている。明治維新より、がむしゃらにつつ走って来た日本だ、これからは、あくせくせず、一步一步進み、地球の一員として平和で温厚な国にして行こう、という民間の一つの考えである。ちょっと変な気がする。

中国人には、“孫子！”は罵り言葉であり、カメに相当する“王八！”も罵り言葉である。

亀田孫次郎——日本人には、こうした名前があってもおかしくはない。しかし、中国人にはこんな名前の存在がおかしくて仕方がない。

人を罵るということは、あまり感心出来ることではない。中国人の罵り言葉は、聞くに耐えない程、どぎつい。よく、“口ぎたなく罵る”と言うが、日本語ではせいぜい、“バカ”とか“アホウ”とか、せいぜい“畜生！”ぐらいではないか。北京の町中や鄭州のバスの中や広州の公共の場で、それは非道い罵りの言葉を耳にしたことがある。その内容は、紹介することが、ちょっとはばかれる。

罵詈雑言は一種の社会現象であるので、好むと好まざるに関係せずわれわれはそう言ったものに遭遇する。それは、その民族の悪しとする価値感が言語文化に表現された一つの形態である。

### 中国語の罵り言葉の種類

① “该死的！” “要死的！” “死鬼！”。 “死”とは人間の最も忌みきらうことの一つである。《西廂記》に、“横死眼不況好人，招祸口不知分寸。”とあり、《水浒传》第二十九回でも蒋門神の女房が武松を“杀才！该死的贼”とあり、同じく三十八回では李逵が張順に“千刀万刚的黑杀才，老爷怕你的不算好汉，走的不是好男子！”と罵られている。

日本でも“鬼籍”と使われているように、中国人は死後は“鬼”となる、としている。それで、“死鬼！” “鬼話！” “鬼点子！” “酒鬼！” “烟鬼！” “穷鬼！” “洋鬼子！” “日本鬼子！”などと使われている。

② “母狗” “狗口里吐不出象牙” “狗腿子” “走狗” “狗颠屁股垂儿” “狗脸” “狗屎堆” “狼心狗肺” “狼狽为奸” “白眼狼” “癞蛤蟆想吃天鹅肉” “无名鼠辈”

人を動物とすることで万物の靈長よりランクを引きずり下して侮辱するこ

と。中国人で、今でも動物と一緒に写真を撮るのをきらいの人がいる。“癩蛤蟆”とは醜男のことで、“癩蛤蟆想吃天鹅肉”とは、そういう類いの男が美人に懸想ずる、という意味。《红楼梦》第十一回：平儿说道，“癩蛤蟆想吃天鹅肉‘没人伦的混账东西，起这样的念头，叫他不得好死’”。

③ “穷棒子！” “花子！” “贱骨头！” “贼寇” “民贼”

貧しいということ、貧しいから盗みを働く悪いやつ、という考え方。

“花子”とはこじきのこと。

しかし、1949年以来、とくに文化大革命の頃、貧しいものはプロレタリアにより近いという思想が根強くあった。貧しい家庭の出、ということ、 “出身好” と言うことで、“オレは乞食の出だ” と胸をぼんとたたいて得意気な顔をしていたやつがいたのを憶えている。“乞食” であったというだけで、政治的なもとでがあることで、字が書けなくても読めなくても、革命委員会の主任などになれた“貴族” …という時代もあった。

④ “泼妇！” “歪辣货！”

おきゃんな女の人を指す。

⑤ “饭桶！” “窝囊废！” “混蛋！” “混球” “浑账”

“馬鹿！” に相当する罵りの言葉。

⑥ “杂种！”

“混血” と言うより、身分のいやしい人の血統が入っている、という意味。もちろん、“混血” という意味もある。

⑦ “小子！” “孙子！” “装孙子！”

“小子” とは“こせがれ” という意味で、封建的な考え方からすると“青二才！” という存在。“孙子” は“孫”<sup>まご</sup> で“小子” よりランクが輩数から言って低い。“小子” とか“孙子” は大きな口をたたかないでおとなしくしていればよい、“でけいつらするな！” “でしゃばるな！”、

と言うこと。“装孙子”とは猫をかぶっている、ということ。

⑧ “德行！” “缺德！”

道徳がない、ということ。

⑨ “乌亀王八旦！” “王八旦！” “他妈的！”

この罵り言葉の詳細な意味についてはちょっと解釈が出来ない。つまり解釈することがはばかれる。まあ、“ちくしょう！”というような意味である。この罵りことばが一番多く使われているようである。とくに“他妈的！”。魯迅はこのようなことを言っている——“だれであろうと、中国で生活をしたことのある人は、よく、“他妈的”とかそれに類似した口ぐせを耳にするだろう。思うに、この言葉の分布は中国人の足跡の至るところにまわりついている。その使用頻度たるや、あらたまつた挨拶言葉“こんにちは”より少ないことはないのではないか。もし牡丹が中国の“国花”なら、これはさしづめ、“国罵”とでも言うべきものである…。”たしかに、この罵りことばはよく使われている。そして“你他妈…” “我他妈…” “他他妈…” “都他妈…” “真他妈…” “多他妈…” などと応用され、ついには“这他妈的, 好吃！”（ちくしょう、うめえ！）という意味にまで使われている。

次に老舎の《茶馆》と《骆驼祥子》という二つの作品から、北京語の罵りの言葉をランダムに拾ってみよう。

《茶馆》：

大傻杨

数来宝的是穷鬼。

爸爸我不是人，是畜生！

你听听，又他妈开炮了。

屌！谁要钞票，俺要现大洋！

屌！俺他个小舅子！

他娘的！走！

打仗，打仗。今天打，明天打，你老他妈打…。

这学生可没什么老实家伙！

哎哟，我的妈呀！吓死我了！

那个老东西，他掐我妈拧我妈，还用烟签子扎我。

说瞎话是孙子！

当了十几年的兵，连半个老婆都娶不上，他娘的！

我把你奶奶的！

那边那边！他妈的笨蛋（旦）！

妈的，我刚十七，就常想着还不如死了呢！

没你那套办法，怎么叫缺德呢？

他妈的，是你，小唐铁嘴！

来来来！让爷爷瞧瞧！咳！你小子行啊！

你小子的脑力是不坏！

哼！缺德公司就挺好！

可这年头就是他妈邪年头。

你还不该死吗？呸！

你们小子干什么的？

他是个天生来的笨蛋（旦）！

就那帮狗男女们他们可都有滋有味的。

《骆驼祥子》

嘿！干他妈的什么哪？

他妈的！放上去！

你小子哪儿去啦？我以为你是让狼叼去啦？

去你妈的！

哎，狗子！打二两去！

今儿个把大爷我累得夠呛！

小子！出门让车压死你！

哼！傻小子！三匹骆驼才卖三十块？

三十匹骆驼！多少钱哪？！姥姥！

奶奶！真他妈的！齏！

找他妈的！挨罵呀？

妈的！这猴崽子！

拉车的臭駱駝！

你个傻骆驼！辣不死你！

你小子不知道好歹！

你这个臭窝头脑袋！

肉包子打狗，一去不回头哇！

敢情这儿有个妖精小老妈儿呀！

我早知道你不是个好玩艺儿！

我就知道你小子吃硬不吃软，跟你说好算白搭！

喜欢你就得了嘛，管他妈别的干什么！

二七？二八我也不去！我齏他姥姥！

冻死的都他妈的是心眼儿好的！

有钱的都是他妈的心眼儿黑的！

我他妈的拉个来回！

小子！少装孙子！

少他妈的装孙子！告诉你，大爷把你放了？

小子，委屈你啦，大爷先用用！

去你妈的！

好小子，有你的！

这小子，是哑巴吃餃子，心里有数哇！

你们少他妈的在那儿吡狗屎！  
告诉你们！着急了我把你们鸡巴踢出去！  
瞧你们一个个的那德性！齧你妈的！  
哼！都是出他妈的一毛钱份子！  
这不简直拿我当他妈的冤大头吗？  
光他妈想白吃啊！哼！  
哼！我算叫一群猴王八给吃了！  
全怨我这儿风水不好！出了丧门星了！  
你給我滚！上他妈这儿找便宜来了！  
呸！你他妈真有脸往外说！  
姥姥！我放把火把这棚子烧了，也不能留给你用！  
姑奶奶也要吹着打着，坐着花轿出这个门儿！  
不出臭汗心里痒痒？你个贱骨头！  
你他妈真“横”啊，你！  
你小子来劲儿了！  
我的妈呀！  
老东西真他妈毒！自个儿享他妈福去了！  
爹把我卖给那畜牲！  
你个傻骆驼！  
真他妈不要脸！  
我他妈把她赶出去！  
姐，小臭骂你是野鸡！  
姐姐！以后他们再骂，我就尻了他！

北京出身の作家老舎の外の作品、たとえば、《四世同堂》などを見て行くと、多くの罵り言葉を避けて通ることは出来ない。とくに、上に挙

げた人力車夫の赤裸な生活を描いた、《骆驼祥子》は北京語の罵り言葉の百科全書みたいなものであるが、あまりにもあけすけなものは、カマトト的にも××としている。しかし読む側は、その××をちゃんと知っていて、それを“賞味”している。トラ娘“虎妞”のそれはサシミのサビであり、トラ娘のオヤジ“四爷”のそれは強烈なブルーチーズ、ドーリヤンなのである。そしてその罵り言葉の一番多く使われているのが、やはり中国の“国骂”である、“他妈的！”である。基本的には農耕民族であったに日本人には生じ得なかった“four-letter word”の中国語版のもっとも基本となる罵り言葉で、フランス映画やアメリカ映画などでよく耳にする。日本語の字幕では“チクショウ！”としてしか訳していない。そう訳すより仕方がない。なぜなら、日本語にはそういう罵り方はないから。

中国人の罵りの言葉を分類してみると、以下の三類に帰着する。つまり：

- ① 他妈的！王八旦！
- ② 你小子！孙子！
- ③ 混蛋！笨旦！饭桶！

“他妈的”とは、中国の伝統的価値感からして、三重の意味がある。1、男女の性的関係は平等なものではなく、男が女を一方的に“してやった！”というものである。2、母親とは家族の中で最も親しみのある存在である。その大切な家族のきづなを強制的な屈辱的な方法で“してやった”ということは、相手をして、精神的に大きなダメージを与えることになる。3、相手の母親と性的な関係を持つということは、相手の母親の父親と自分は同じ輩数に位づける、つまり、おれはお前のおやじであって、お前はおれの“小子（せがれ）”なのである。そんなひどいことをおれにされるのだ、お前は、能なしばかものめ！だ……という重みがあ

る。そういう意味でもっともひどい罵りの言葉である。それから“他妈的”とは、自分の母親と関係を持つ、イヌ畜生野郎という意味もある。いずれも、性的関係をからめての罵り言葉で、“人でなし”、“ちくしょう”という意味である。“王八”とはカメの俗称であって、カメのオスはメスが外のオスと関係を持っても、そばで平気な顔をしているという。男としてのメンツはともかく、家督を子子孫孫にひきつぐことが封建的なかなめとする価値感からすると、妻にそんなことをさせて平然としてゐるやつは、人でなしなのである。その“家”は結局“他人”のものになってしまう。また、一説には、“王八”は“忘八”から来ているとも言ふ。封建的な思想の支柱である孝・悌・忠・信・礼・義・廉・恥を忘れた人でなしという意味がある。“旦”とは、京劇などで、“武旦”とか“花旦”とかの“旦”で、その役割を演じているもの、という意味である。セックスとは必要悪であって、そうした一方的な行為を、こらしめ的手段として使う、それが“他妈”の本質的な意味なのだと思う。それで、“禽！”“他娘的！”“你奶奶的！”“你妈的！”“姥姥！”“妖精！”“我禽他姥姥！”“去你妈的！”“鸡巴！”“畜生！”“野鸡！”“尻！”“屌！”が、相手を罵倒する言葉として成立するのである。“妖精！”などというのは、現代感覚で言うくと、チャーミングで、ワクワクした気分させると受けとってしまうが、女の人にうつつを抜かして、子孫の繁栄に精力を尽くさないのは、ダメ男なのである。それで、“丑妻近地家中宝”ということわざが出て来る。

“小子！”とは父の子という意味で、祖父・父・子・孫というタテの関係で言うくと輩数が一つ下ということになる。“孙子！”とは、オレとオマエは孫の関係だ、ということで、格がまた一つ下になってしまう。そして“我老子”（おれというお前のおやじ）は“おれ様”。上に挙げた、“让爷爷瞧瞧！”“今几个把大爷我累得够呛！”“告诉你，大爷把

你放了？”“大爷先用用！”“姑奶奶也要吹着，坐着花轿出这个门儿！”と輩数を多く言うことで、相手を見おろしたり、“おれ様”という意味になったりする。つまり、マイナスのマイナスでプラスということである。

“混旦！”“笨旦！”“饭桶！”とは、ばか・のろ・ごくつぶし、という意味である。上の例で言うと、“他妈的，笨旦！”“他是个天生的笨旦！”“你小子不知道好歹！”“你这个臭窝头脑袋！”“你个傻骆驼！”がそうである。

#### まとめ

以上、中国人の罵りの言葉について見て来た。すでに述べた如く、その民族の罵詈雑言の罵詈雑言であるゆえんは、その民族の価値感が言語文化に表現された形態である。その民族の良し、悪しとする尺度も、時代の変遷と共に変わって行く。1949年の新中国の誕生は中国人の価値感を大きくゆるがした。ひたいに汗して働く労働者や貧農小作農は“善”玉で、坐して利を得る資本家や地主は“悪”玉であり、肉体労働をするものはそれだけで“出身の良い”その時代の“貴族”であり、頭脳労働で飯をくっているインテリは“臭老九”（“はなつまみ九郎”）と位置付けられた。中国人の罵りの言葉を分類してみると、①他妈的！王八旦！②你小子！孙子！③混笨！笨旦！饭桶！、となる。これは①こん畜生、人でなし！②でけえつらするな！③ばか！になる。そして、使われる頻度とその“こり様”は①、②に集中している。その上、なぜ③（ばか）なのかと言うと、①、②をはっきりわきまえていないからなのである。しかも、その①、②で評価されるものは、多くは封建的な尺度でなされるものである。いわゆる“改革・開放”以来、いままで否定されて来たものが再評価されて来る。ペットがかわれるようになり“阿猫”“阿狗”

はけったいな存在ではなくなった。“あの人はお金持ちだ”ということは、羨望の対象となる。“小妖精”は“すばらしい!”ということになる。数十年の幅ではあるが、社会の価値感がネコの目のようにころころ変わるのである。そう言った価値感の変化を追って行くのも意義あるものではないかと思う。絶対的価値観はないのである。